

# 源信和尚の仏土観

細川 行樹  
(本願寺派)

—

源信和尚の仏土観は旧来一般には往生要集によっている。而して私共真宗者にあつては法然上人の広・略・要の三例を指南とし、或は宗祖の報化弁立に導かれて其の浄土観を見るように教えられてきたのである、斯かる元祖、高祖の卓越した指南は爾後の往生要集観、ひいては和尚の浄土観を伺う可き尊い方向づけを与えられたものである。併し和尚には数多き著作があり、其の全体系中に於て浄土観を捉えねばならぬようにも考へるのである。周知のように要集は源信（九四〇—一〇一七）が四十三から四十四歳にかけての壮年期の作であるが其の老年期には長和三年（一〇一四）七十三歳の時に「弥陀陀経略記」や「正修観記」があつて是等には「西方の化主は是れ一応化なり」とか「我等が欣ぶ所の依正は四土不二の同居の極楽三身相即の劣応の弥陀なり」とかがある。又、観心略要集は、「強固の載の夏五月序す」とあるのみで製作の年時は定かでないが、丁の年は永延元年四十六歳、或は寛弘四年六十六歳時となり、何れにしても往生要集の著の後となる。此の観心略要集の第四、弁空仮中二蕩レ執の項には、「己心に仏身を見、己心

に浄土を見る」<sup>④</sup>との説もあり、和尚が彼土往生を否定されている如きにすらも思はれ、その願生心の在り方更らには和尚が欣求されたる弥陀浄土をば如何に判すべきか、其の真を尋ねたい。

## 二

先づ源信の浄土観を何うのに往生要集の巻頭に「天台首楞嚴院沙門撰」と署名するは、天台教学を宗として往生極楽の教行を目足とする者であつて、法然の如く天台教学を廃して念仏往生の行を修すのでない事を知る可きである。かく二者の教学の宗とする所は異とするのである。是れを弁別せずして源信の浄土観を摸索せんとすれば其の真を得ないものがあるのでないか。

教祖天台大師は維摩經略疏に浄土を積して是れを四土に区分して、凡聖同居土、方便有余土、實報無障礙土、常寂光土とし、弥陀の西方極樂浄土をば凡聖同居土なりと判じ、<sup>⑤</sup>卅二相の勝応身が応現するも依然凡夫が同居する土であると説き、仏のみの所居の土は常寂光土なりと説く、其の土の界相を積して

「妙覺極智所照如々法界之理、之を名づけて國と為す、但大乘法性即ち是れ真の寂智の性、二乘偏真之理に同じからず」

と説いている。故に浄土と言うも有相の境を指すのでなく、妙覺極智所照の法界の理境である。而して其の法界の如々の理をば三諦円融の実相として天台宗に於て説かれているのである。

観心略要集、第三、歎極樂依正功德の項に、今期する極樂の依正はとて、源信が究竟せんと所期する浄土の依正を表註して、天親の浄土論を引き「觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虚空、廣大無邊際」と、その有量相なき無邊際の実土たるを言い、次で其の体性を更らに浄土論の触功德の文を引き、「宝性功德草、柔軟左右旋、触者生勝樂」と言つて

大乘善根の境にして無苦無悩の砌にして、二乘偏真の理に勝過して大乘無上の妙界に其の根の触れ得たる境であることとを述べているのである。其の土の内容をば瑠池の浪の声には一実中道の教が演べられ、棋樹の風の響には三諦即是法の法を説き、或は瓔絡真樹の色には法界円融の色を現すと説いている。<sup>②</sup> 仍って所期とする極楽依正とは三諦円融の法界の妙覚を開会して、其の根真に触れ得たる如々の境であり、即ち常寂光土の風光を語っているのである。而して此の土は卅二相の弥陀の応化身でなく、觀經真身觀に見る八万四千の相好身の応現を觀じ、その白毫相の光明により中道第一義を覺せしめているのである。それ故に此の土には純菩薩のみあって弥陀は此の菩薩の会中にありて、常に正法を演説しているとなす。即ち法華經に説く円教の諦理が常恒に開演され聞受されている妙境である。

此のように觀心略要集には仏界をば三諦即是の常寂光土とし、弥陀も八万四千の好相を現じて、白毫光は中道実相の諦理を照す一如界である。弥陀の西方淨土は未だ仏と衆生との対々の境にして卅二相の応現化身土となす。それでは天台が説く三諦円融の諸法実相の妙有の境とは如何ようなる理を説くのか。

三諦とは天台宗義の第一祖としている龍樹著、中論卷四、觀四諦品第十八偈。

衆因維生法、我說即是無、亦為是假名、亦是中道義

天台大師は此の偈をば空仮中の三諦相即の諸法実相の理の説かれているものと釈解す、以来三諦偈と呼び慣らしている。<sup>③</sup> 併し中村元博士は著「東洋人の思维方法」に此の釈意を難じ、シナ語の指示代名詞に・性数・格がない為に「是」のさす語をとりちがえて中論の原意と別なる意となしている、原文の意は、「縁起なるものを、われは空なりと説く、それは仮名にして、それは即ち中道なり」。龍樹は縁起・空・仮名・中道の四つの概念が同一趣意のものであり、この四語は同義の語であることを「是」の字が指示しているのであると述べている。

周知の如く曇鸞は此の中論偈の空仮の理を基にして淨土論の願生の生の義を註している。衆生の虚偽不実と仏の

眞実功德の在り方を言い、仏の眞実功德とは衆生の不実功德を撰して畢竟淨に入らしむるにあると説き、それを空無自性縁起の理に基づいて論証している。願生とは因縁義の故に仮名生であり、衆生の実有とする妄見を以て仮名人と言ひ、仮の虚妄が仏の功德によって空せられ否定されて仮名即ち空無自性の諦理に順じて一如に同乗して得生するのであると、仮の意味を二重に釈して、初の衆生の仮虚妄性を否定し、後の仮無自性を肯定して願生の義の眞実を論じている。

然るに天台大師は此の三諦偈を実相論の証となすので、他師とその積意を異にするのである。

智顛の三諦偈の釈に於て最も特異なるは、仮に対する概念規定である。摩訶止観、卷五下に、「仮とは虚妄顛倒これを名づけて仮となすのみ<sup>⑩</sup>」と説く、衆因縁生法の仮なるを实有となし、虚妄顛倒を仮なりと否定せず、仮有として肯定して其の眞実在としての意義を示す、即ち空に即する実相なりと説くのである。虚妄顛倒の仮の在り方を釈して、「又一一の仮の中に於て復三仮あり、謂く、因成仮・相続仮・相對仮なり、法塵、意根に対して生ず、一念の心起るは即ち因成仮なり、前念後念次第に断ぜざるは即ち相続仮なり、余の無に対して此心有りと知るは相對仮なり」とある。此土に於ける衆生界の念念生起の有心を仮となし、虚妄顛倒の存在の在り方を眞実としてるのである。即ち物の存在の当処が其の存在のままに於て諦かに覺知されぬままに虚妄顛倒の妄相なる在るぶりによって対立的に存在していることを知らしているのである。併し如何に斯かる千差の差別相のままにあるうとも、其存在に於ては色心等しく一色一香無非中道を説き、三諦相即円融の理具に於て平等なることを説くのである。

斯かる法界実相論を天台宗に於て説かれるのは、法華經方便品に、

「諸仏両足尊、法常無性、仏種從縁起、是故説三乗、是法住三法位、世間相常住、」

との經説に基づき実相論の成立根拠となす、世間仮有の当体のままに常住眞実を語り、一虚の染法もその存在の理に

三諦円融を觀じて、縁に従つて仏種の一乘開會して法位に即すること証せんとすのである。往生要集、作願門にあつては「諸法実相を得れども大悲を妨げず、かくの如き方便を生ずる、この時、便ち菩薩法位に入りて阿鞞跋致に住することを得る」と、諸法実相の理具に、いよいよ弥陀大悲を知り願生道に於て念仏する時に法位に住することを説いている。但し天台大師は摩訶止観卷六上には、七仮の因縁を説き「能く世間に入るに生死煩惱と雖も知恵を損ずること能はず、遮障留難弥化道を助く」とて、慈悲・誓願・智恵・善巧方便・大精進の五因縁によって、此土に於ての仏種の長養開萃が勸進されているのである。以上、台宗に於ける三諦偈に於ける仮有の妄想顛倒を否せず実有としての仏種開會のあり方を伺つたのである。

### 三

翻つて、觀心略要集、第四、弁空假中一蕩執の項に「己心に仏身を見、己心に淨土を見る」の説を見て、和尚の弥陀西方淨土に対する願生心の在り方に何かの疑義を抱くは全く和尚の信相に対し理れのなきことである。觀心略要集に説かれてある三諦円融の理觀念仏の裏に、いよいよ厭離穢土、欣求淨土の意染を新にして願生道に帰せしめてあることを知る可きである。己心に仏身・仏土を見るとは、先きに述べし如く、三諦円融の実相の理によって仮有の己心の染法のままに仏界と相即融通なる事を知らしめ、是れを諦觀することを述べているのである。觀心略要集にはそれ仮に二あり、一には且暮徒らに空しく穢土に執じて一期を終える。二には此土の仮有を知る、仮諦即ち法界にして一法は定んで一法ならず、一塵法界と觀するに我が心に分齊なけねば三千融通して心念朗らかに達す。と述べる。法界の実相の仮有の在り方によって即ち三諦相即円融の觀照をなすのである、此所に一法も孤ならず一念の己心にも三千融通なることを覺して如々の仏界に一乘開會することを説いているのである。

但、法華玄義一ノ下に「一切の諸法は皆妙ならざるなし、一色一香も中道に非ざるなし、衆生の情によって妙を隔つのみ」とも或は「法はもと妙にして隔つは物情にあり」と嘆ぜられる如く、三諦円融の法爾の理具に逆して、衆生情念の起る所、必ず一界に隔てられ地獄より仏界に別する十界の彰顯を見て、然かも十界の互具互融を見ず断絶のままに沈淪するのである。

源信は略要に於て「我書淨を隔てて、穢を見、妄想に封ぜられて一に於て異を見る」と悲嘆するのである。己心に仏身を見、淨土を見るべき体法無作の妙有の存在にあり乍ら、却つて淨を見ず穢を見るのみである事を知らしているのである。

以上の釈により、理觀念仏とは三諦円融の実相觀に於て己心に仏身・仏土に即する妙有を体しながら、理即・名字即の分済に滞り却つて恒時に淨を見ずして穢を見る理を觀ずることを説くものでないか、此所にして、西方弥陀淨土への欣求は自然なるを見るのであろう。但、觀心略要集に於ては理觀念仏を説くもの故に淨土も理によって願求されているのであつて、「極楽は空觀の境に非ざるに似たり、然りと雖も既に亡泯三千と云う。何ぞ忽に弥陀の依正に滞せんや。」と説かれる。淨土への欣求は仮有の境にして空觀の境に非ずとするが、一念三千の実相觀に於てすらも三千諸法は、やがて一即一切と亡泯するものである。弥陀の依正とても廿九種の妙相に永く停滯するものでなく、やがて淨穢は亡泯して「寂靜但名あり」とする。斯くして如々法界の理に一乘開会するのであつて仮有の仮有たる所以があることを論じているのである。斯のように觀心略要集の淨土は空假中三諦円融の理に於ける淨土であり。是れに對して往生要集に説く淨土は三諦相即円融の理に於ての仮有の淨土であり、事相の淨土である。要集、臨終行儀の臨終勸念にも、法性は平等なれども仮有を離れずとて、大無量壽經下、往觀偈を引き、通達諸法性一切空無我專求淨土必成如是刹と、空性のままに有なる淨土の求念の用を説き、願心有相の淨土こそ虚妄心に離れぬ仏願心の事相たるを

明しているのである。斯のように有相、限量の浄土とする故に弥陀浄土をばその報化を如何が厳しく論ぜられるのである。

#### 四

往生要集、大文第十、問答料簡の第一極樂依正に於て弥陀身土の報化論を見るが、第一問答に先づ、天台大師の応身仏同居土、淨影の応身応土、道綽の報仏報土の説を挙げ、古旧等、相伝えて皆化土化身と云うは大失と為すと云う。而して大乘同性経を証文として浄土中の成仏たる阿弥陀如来は報身仏であると断じ是れを明確にしているが、その土に得生の機に対する三師の説に対しては何の批判もせず、その取捨を示していないのである。斯かる源信の態度を以て、身天台の沙門たるを以て、其の立場上の故にとする見解は如何なるものであらう。先きにも述べた如く、源信は七十三歳の晩年にあつて「阿弥経略記」や「正修観記」に「西方の化主は是れ一応化なり」とか、「我等が欣ぶ所の依正は四土不二同居の極樂三身相即の劣応の弥陀なり」と明らかに吐露しているのである。

然し斯かる願信の弥陀浄土に対する讃仰の在り方にこそ三諦円融の実相觀の教学を基底にしての特異なる所があるのであり、頑魯の身に応同しての四十八願心を敬慕される所以である。仏界には常寂光土も西方浄土にも体徳に異りはなく其れは一なるものである。

個々の対々の差別を超えたる三諦円融の如々智の所照の土であるとなす。觀心略要集の極樂依正功德にも往生要集大文第二欣求浄土の第四、五妙境界樂にあつても、等しく世親浄土論の文を引き、「觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虚空、廣大無辺際」として三界有相を超えたる限量なく、停滯することなき究竟如虚空の土たるを明かしている。但、西方浄土は有相なきままに有相を見るは、四十八願莊嚴の相であり、一切万物窮美極妙にして見る所淨妙色であり、

聞く所解脱の声ならざるなきと絶唱しているのである。是れ一期の程は三諦円融の如界に開会せずして妄想に隔てられて淨に穢を見、一に異を見て、仮有の業繫に纏縛されし身に解脱の喜びの顕色と、妙声を聞見せしめんとする願土である。故に觀心略要集には淨土は大乗善根界に即し得たる土と示し、要集の西方淨土の五妙境界樂には「以三諸妙衣遍布<sub>二</sub>其地<sub>一</sub>一切天人踐<sub>レ</sub>之而行」と大無量壽經上末の弥陀淨土の正報の果徳を引く、以て弥陀淨土の仏の慈悲心大地に遍布して生ぜし者等しく仏の悲心の上に行ずる自づと大乘善根界に一如たり得る事を示しているのである。

併し、斯かる願土に生じ得ても、其の報土たるを感見して如々の境に開会するの期は亦自づと別するのである。此所に於て、弥陀願心に相應し一如たり得ぬ虚仮の自覚深まる所、更に弥陀願心の深きを知り其の我身に對する化益を欣じて、「西方の化主は是れ一応化なり」とか、「我等が欣ぶ所の依正は四土不二同居ぶ極樂三身相即の劣応の弥陀なり」とかの述懐となり、報中の化土を見る所以となすのである。

往生要集、大文第十問答料簡、極樂依正の第五問答に迦才の淨土論を引いて、「衆生起行既有三千殊<sub>一</sub>往生見<sub>レ</sub>土亦有<sub>二</sub>万別<sub>一</sub>也、若作<sub>二</sub>此解<sub>一</sub>者諸經論中或判為<sub>レ</sub>報、或判為<sub>レ</sub>化皆無<sub>二</sub>妨難<sub>一</sub>也」とあるを、此の積善しと迦才の淨土觀に同じているが、報化の別は往生者の機の別であり、仏土の報化は其の機に對して応現することを斯く迦才が論じている事に讚意を示しているのである。

往生要集、大文第二欣求淨土の第二蓮華初開樂は彼土の初開の相を説いている。淨土の光明の照益を得て身は紫磨金色と作り、仏の光明を得て清淨眼を得る、前の宿習に因り衆の法音を聞くと、全く彼土の仏身・仏土の勝益によつての果報なるを述べているが、斯かる勝益を得たる宿習の因をば、此の項の最後に「昔娑婆に於て纔かに教文を読みたらんに、今正しく此の事を見る歡喜の心幾ぞや」と結んでいる。經証は多く觀經に依るとあるから、教文を觀經とも見られようが、真意は法華經を指し、諸法実相一乘開会の教説を示しているとすべきである。其の故は、往生要集、



大文第一、厭離穢土、第七總結厭相に、人趣の受け難く、仏教に遇い難く、更に信の生ずる事の難きを言い、大經（涅槃經）の文を引き、次で、「法華經云、無量無數劫聞此法亦難、能聽是法者此人亦復難。而今適具此等緣當知下離苦海往生淨土」とある。法華經に説く、世間相常住、実相妙有の法門を聞く者にして淨土の縁開けて得生すると述べている。

斯くの如くに法華經の実相法門を聞信する者にして始めて淨土往生を得るのであると説くは何故によってであろう。往生要集、大文第十問答料簡、第二往生階位の十一問答に、懐惑の群疑論によって阿彌陀仏国に生ぜんとする者皆懈慢国土に著して進んで阿彌陀仏国に生ずる者は億千万人に一人位であるとの処胎經の文により問っている。答で、それを懈慢に由って執心不牢固雜修の者は執心不牢固の人となす、故に懈慢国に生じて阿彌陀仏国に進み得ないのであると説いている。それ故に執心牢固の者は專修にして報土に往生すると説く。一般に執心の牢固の意を如実の念仏信の意と解しているが、執心の語は有執とか我執とかの用語としていっているもので他力如実信の用語としては不相応なものでないか。

惟うに懈慢国土に停るは三諦円融の実相法門を如実に聞信し行修しないからでないか、觀心略要集の初めに、心地觀經を引いて、「能く心を觀する者は究竟して解脱す、觀ずる事能はざる者は究竟して沈淪す」と説いている。己心の三諦円融の実相を覚知せず、却って空に著し、有に著すことの其の執心の如何に牢固なるを觀知する事なくしては阿陀報土の極妙相の慈悲心にも触れ得ず、念仏專修たり得ないのである事を力説しているのでないか。

往生要集、欣求淨土、第四五妙境界樂の末尾に淨土の極妙相を説き、諸仏淨土嚴淨妙事は皆悉く此中に撰在せりと説き、其の功德第一なるを歎じ、若し是の如き国土の相を觀ずる者は無量億劫の極重惡業を除き命終の後必ず彼国に生ずると、此土に於ける淨土觀想の功德を説いている。是れ觀經宝樓觀に出で依報觀想の功德とされているものである

が、極重悪業を除くとは、弥陀四十八莊嚴土も有執心の牢固にして三諦に隔歴して相即せぬ己心に於ける弥陀悲心による迎接相なる事を知らしめているのである。

ここに自づと懈慢国土を出で如実に報土に得生するのである。

## 註

- ① 恵心僧都全集第一、四〇〇頁  
 ② 前同 五一六頁  
 ③ 前同 二七三頁  
 ④ 前同 二八八頁  
 ⑤ 大正三八、五六四、中  
 ⑥ 前同  
 ⑦ 恵心僧都全集第二、二八二頁  
 ⑧ 天台性具思想論 安藤俊雄 六七頁  
 宇井伯寿著作選集国訳中論 二一八頁  
 ⑨ 東洋人の思惟方法 中村元 三八頁
- ⑩ 七祖聖教上、論註上 七丁右  
 ⑪ 国訳一切経 大東出版社 止観 一九二頁  
 ⑫ 同前  
 ⑬ 天台性具思想論 安藤俊雄 二二頁  
 ⑭ 恵心僧都全集 要集卷上之末 二二頁  
 ⑮ 国訳一切経 止観 二二六頁  
 ⑯ 前同 二一六頁  
 ⑰ 前同 二九〇頁  
 ⑱ 往生要集 観察門 総想観  
 無量寿経諸異本の研究 園田香勲 三四頁  
 ⑲ 観無量寿経疏妙宗鈔概論 安藤俊雄 四二頁